

# 紙上法話

## 「心の中心」

センター布教師 岡山県 中興寺住職 野口祥善



今日、日本は豊かさに満ち、立派な家を建てる方はたくさん居りますが、はたしてその中心というものがあるでしょうか。また解っているでしょうか。かつての日本の家庭ではこのような良い習慣がありました。それは朝出かける前には先祖に対して一日の無事と心を謙虚にして精一杯働くことを誓って出かけ、帰った時には仏壇の前に行って、無事安全と命を充実することができた感謝の報告をしたものでした。また、ご近所や親戚から戴き物をした時などもおじいさんやおばあさんがまずご先祖にお供えをして報告してきなさいと指示したものです。それからおすそ分けを頂戴しましょうといったものです。

そのように家族のみんなが心を一つにする処、心を一つにして家庭を築いていく家の中心、それこそがご仏壇、神棚であり、つまりお祭りする処であります。祭るといふ事はそのように家族全員の心を一つにして清らかな心を祭るといふことなのです。今日の私たちの命へ伝え繋げて下さった先祖に対して感謝し、それと同時に今と一緒に生き、生かさせて下さっている全宇宙の命に感謝して手を合わせる処なのです。そしてその中心に仏教の元祖であるお釈迦さまが居られるのです。

お釈迦様の一番肝心な教えは縁起の教えであります。私というものが時間的にも空間的にもあらゆるすべてのものに支えられて生かされている存在であるということです。支えていただいているすべ

ての存在に感謝できる心を持つる人は、簡単に人を傷つけたり殺したりすることはないはずですが、いわゆるお陰様という言葉に裏打ちされるように見えない支えに対する感謝の心がかつての日本人の心には沁みついていました。大和の国の頃から聖徳太子が仏の教えを国造りの根幹として十七条の憲法を定めてより、仏教の精神は日本文化の底流を支え続けてきたのです。茶道書道華道、剣道柔道弓道など「道」がつく文化の全てに仏教の教えが根底にあり、花開いたものです。それは知らず知らずのうちに人の心を豊かに育てた人としての道を学ばせることに大いに貢献してきたものです。

道元禅師は若き修行時代に二十四歳にして中国へ渡り、悟りを得て二十八歳にて日本へ帰って参りましたがその時に言われたのが「空手還郷」というお言葉でした。『私は中国でお悟りを得て帰って参りましたが特別なおみやげは一切ありません。空手で帰って参りました。ただし「眼横鼻直」なる事を知りました。』と答えられたのです。つまりすべての物事を真直ぐな心で見、ありのままの姿で、真直ぐな命で生きることが出来るようになったという答えだったのです。そしてその在り方とお姿こそが仏道そのものであると表現されたのです。

お釈迦さまより道元禅師様そして歴代の祖師方へ、またそれを信じ支えられて善根を積み重ねられた祖先方を心の中心としてしっかりと勤めていきたいものです。